

現場への思いに駆られ要職捨て 開業医としてせきと向き合う

国内有数の大病院の部長や大学教授という要職にありながら、臨床への強い思いに突き動かされて、「開業医」として再スタートを切った内科医がいる。

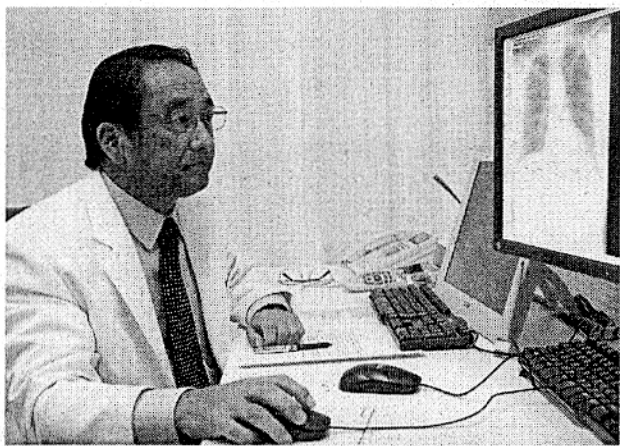
東京・内幸町にある中田クリニックの中田絏一郎院長は、長年にわたって虎の門病院の呼吸器科で診療に当たり、母校の順天堂大だけでなく東邦大学からも教授として招かれた、呼吸器疾患治療の第一人者だ。

開業医の次男として生まれ、兄も医業に進んだ医師家系。自身も当たり前のように医学部に進んだが、ここで運命的な出会いがあった。当時虎の門病院に

46 50人 名医 専門で選ぶ

中田クリニック(東京・千代田区)
院長
中田絏一郎さん

いた本間日臣医学博士との出会
いた。
本間博士はフルブライト留学



生の第一期生として渡米し、近代呼吸器病学を初めて日本に持ち込んだ、日本の呼吸器医療の中興の祖。学術の面で最高位にありながら、一方では温厚な人柄で常に患者本位の医療に徹する診療姿勢に感銘を受け、その

門下生となった。
「常に患者さんと接する臨床医にとって人柄がいかに大切であるかを思い知らされました。私が部下を持つようになり、最も重視したのもここ。知識や技術的に優れていることはもちろんですが、人柄に問題があるようなタイプは最初から採用しませんでした」

呼吸器科の治療は特に患者と長い付き合いになる。信頼関係がないと効果的な治療は望めない。こうして患者との対話を最も重視した診療姿勢で実績を積み

重ね、教授まで務めたが、そこで思い悩むことになる。
「大きな組織では、私が決めた治療方針でも実際に行うのは部下です。そんなところに徐々に不満が積み重なっていったんでしよう。結局は向いていなかった」ということですよ(笑)」

との思いは募る一方だった。熟考の末に昨年、古巣の虎の門病院の支援の下で開業。その支援とは、中田クリニックで診察を受けている患者に入院や精密検査の必要が生じた時、虎の門病院に優先枠が用意されているというものだ。

「患者とゆっくり話をし、その時だけ喜びを感じた。それが成功した瞬間だった」と中田院長は語る

なかつた。こういふちう 1944年兵庫県姫路市生まれ。68年順天堂大学医学部卒業。虎の門病院レジデント、順大医学部助手、虎の門病院呼吸器科部長を経て、98年虎の門病院診療部総代・病院長補佐。2002年順大医学部呼吸器内科客員教授併任、03年東邦大医学部呼吸器内科教授。05年中田クリニックを開設し院長。日本内科学会認定医、日本呼吸器学会指導医・専門医・代議員、日本感染症学会認定医・評議員など。医学博士。

「人柄重視」で選ばれた教員たち。まして自分たちの元ボスから紹介されてきた患者を冷遇するはずもなく、患者にとっては最高の医療連携が約束されているのだ。

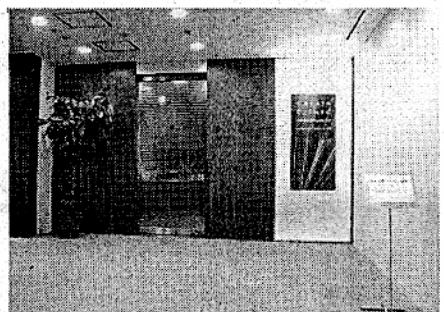
また、中田院長自身も大病病

人の名前と野菜は忘れやすい。

院での窮屈さから解放された、自分のペースで診療できるようになった喜びを隠さない。「患者さんとゆっくり話がありました」

地道な診療と全国的な成果

こうした地道な診療の一方で、中田医師は「ワクチンによる肺炎予防」を提唱し、全国的な成果を上げている。肺炎は、特に高齢者の場合、



■クリニック情報
東京都千代田区内幸町2ノ2ノ1日
東プレセンタービル地下1階(東
本メトロ丸ノ内線・千代田線「霞
ケ関」都営地下鉄三田線「内幸町」徒歩
3分) ☎03-5511-7770。ホームペ
ージはhttp://www.nakata-c
linic.jp/。呼吸器内科専門クリ
ニック。同じビルに乳腺外科と心療内
科のクリニックが並び、必要に応じ
て紹介しあう「診診連携」も行う。初
診の

たかった。ここでは一人に平均20分をかけて診療ができます。呼吸器科の診療で一番重要なのは問診。「せき」という一つの症状に、さまざまな患者の訴えを重ね合わせて、最終的な診断を下す。そして治療が奏功したとき、患者さんと同じくらい医師の喜びも大きい。それが実感できるだけでも、開業した甲斐がありました」

その運動が実を結び、2000年以前は全国で年間40000本程度だったワクチン使用量が、02年には16万本に達した。中田院長は「私一人で啓蒙したわけじゃないので」と苦笑いするが、呼吸器内科の第一人者による提唱は影響が大きいことも事実だ。

日本を代表する権威が、最高水準の知識と技術で診る専門性の高い外来診療。新しい形の開業医療として注目される。
(医療ジャーナリスト 長田昭二)
■次回(10日発行)は「歯科無痛治療」の九段下スター歯科医院・田中和之歯科医師